資本論と人間自然・土地自然

梅　垣　邦　胤

はじめに

本稿は『資本論』における，人間自然と土地自然の探求の跡を整理したものである。通常，両者は１対１で対応する２者としてイメージされる。人間は自然にやさしく，人間と自然が共生する時代などの言辞が繰り返し語られている。確かに，両者の相互関係とそれぞれの特徴を検討することは必要な作業であり，本稿においても継承される。しかし，人間と自然の関係はそれだけで尽きるものではない。ウィリアム・ペティーは「労働は富の父であり，大地はその母である」といった。その含意は人間自然と土地自然が結びついて新たな富を創造する，つまり富を生み出す不可欠の２要因という意味である。とすると，この両者は２項対立を構成する２要因という位置付けを土台として，たとえば原始共同体における人間自然・土地自然，あるいは資本主義における人間自然・土地自然として，つまり特定の社会経済システムにおける両者として，したがって特定の社会経済システムの特有の法則性に規定される２つの対象として位置付けられる。これは，以下見られるように『資本論』の分析とつながるものである。人間と自然は，人間対自然という関係があるが，それはあくまで土台であり，メインの分析対象は社会システムとの相関で把握された人間自然であり，土地自然である。以下，第一章では両者の相互関係，それぞれの特質などが検討される。第二章では，商品生産の法則との関連で，第三章では資本の法則との関連で見られる。

『資本論』は，価値，剰余価値，蓄積，利潤率，商業利潤，利子，差額・絶対両地代といった系列で研究されてきた[(1)]。しかし，『資本論』にはメインの分析に人間自然，土地自然の契機が明らかに組み込まれており，それが『資本論』をして強固な社会経済分析の書であることを傍証している。

第一章　人間自然と土地自然

ここでは，両者の関係，それぞれの特徴などが見られる。人間は自然を破壊してきた，今自然にやさしくなどと言われるとき，無意識に人間の圧倒的優越性と傲慢さが指摘されている。しかし，時間的前後関係では土地自然が圧倒的に先行し，人間自然は最近に近い短い期間に存在しているに過ぎない。「人間そのものの自然」[(2)] という『資本論』の言葉はこのことを前提にしたものである。時間軸を可能な限り長く取って，その点を概観しておこう。人間にとって大地が本源的な生存環境であるが，大地そのものがない時代があり，ある一定の時点で存在したものである。宇宙自体その年齢は140から150億年であり，またあと100億年で寿命は尽きる。根本的には宇宙自体が誕生し継続し消滅する対象である。宇宙の中で，45億年前に太陽系と地球が生まれ，これも後50億年後には蒸発し，消滅する。海をもつ地球において，海の中で40億年前に生命が生まれる。０度以上100度以下の温度であったことが海を可能にし，生命を可能にした。これが，人間にとって

決定的なことの第１である。第２は，27 億年前における光合成する藍藻類などの植物の誕生である。$6CO_2+12H_2O \rightarrow C_6H_{12}O_6+6H_2O+6O_2$　太陽と２酸化炭素と水により，植物はでんぷん，糖類など炭水化物を作りそれで生存する。人間にとって不可欠な酸素は植物にとって無用な廃棄物である。これが，上の式が示すものである。水，２酸化炭素と太陽エネルギーで光合成する植物が生まれて初めて酸素が出来るのであり，そのどの１つが欠けても人間は誕生不可能である。圧倒的な自然先行性を示している。事実，人類は何十億年という地球の歴史において，数字が三桁も少ない 700 万年前にアフリカで生まれた。直立２足歩行で，特に前足が進化した手で武器を使え強い生物種となり，肉食などで脳髄は大型化した。それから約 500 万年の間，人間はアフリカのみに住んでいた。180 万年前，アフリカからの長い旅が始まり，アフリカにとどまるもの，ユーラシア大陸を西に，ヨーロッパ大陸に，東から北へアジア，アメリカ大陸に，オーストラリアにという移動の流れが作りだされる。アフリカにとどまったものがネグロイド，ヨーロッパでコーカソイド，アジア，アメリカでモンゴロイド，オーストラリアでオーストラロイドという３大（あるいは４大）人種が定着する[3]。土地自然の人間自然に対する圧倒的な先行性を示しており，人間はここでは受動的従属的なものである。現在における，暗黒の原生林，膨大なエネルギーを示す海洋と海流，すべてを凍らせる零下 50 度から灼熱の 50 度，60 度の温度差，激しい風の変化，地殻変動などに対する恐怖と畏敬の気持ちを時に経験するのも，自然神を否定しないのもこの自然への受動性ゆえである。人間は新たに誕生し，しかし確実に死を迎えるのも人間が自然のなかに融解することを示している。人間自然は圧倒的に土地自然に包摂され，規定され，その中に溶け込む存在である。以上のことを前提した上で，人間自然と土地自然のそれぞれの内的世界を概観する。

人間における頭脳による，必要な情報収集，分析，目的とした対象物の生産に先立て，必要な素材，道具，加工技術を考え，計画し，構想し，客観的に提示するという行動領域，これが人間自然の，他の自然には見られない第１の特質である。先の脳髄の大きさが可能にしたものであろう。構想は実行に移され実際に加工過程における，様々な障害，ミスなどをチェックし，完成物を確保すること，それが第２の特質である。以前の実践過程で明らかになった欠陥，非効率性などに注目し，それを改善した形で過去とは区別されたプランを作り，より効率的となった形で実践過程に入ること，それが第３の特質である。ここには，本能的実践と比較して，事前の情報収集，分析，構想，実践プランなど余分な時間を必要とする。実践と相関した頭脳労働の時間が組み込まれている。そして，それが１度だけでなく，結果を受けて改善された形の２度目，３度目の構想と実践がある。本能的実践のみであれば自然環境の違いによる多寡のみであった生存手段が，より多く，より安定的に，より多様に獲得することが可能となる条件がここに作られている。野生生物を含む土地自然が本能的実践を特徴とするとき，事前構想そして実践というプロセスは人間自然を区別する大きな特徴となる。『資本論』における，人間自然の学習能力，発達能力，弾力性などの指摘につながる領域である[4]。なお構想のためには余分の時間が必要であることに関して，人間が人間社会と自然をより深く観察し，分析し，実践の構想を練ることと，科学，文学，芸術，豊穣な人間関係，自然関係のためにはゆったりとした膨大な自由な時間が必要であることを示している[5]。

土地自然に関して，その先行性は決定的であり，「土地そのもの」[6] は，直接的生産過程に導

入されなくても，その活動の舞台となる大地そのものである。雨雲，山林，海から提供される自然水，魚介類，オットセイなどの野生の動物，バナナなど直接に食用可能な植物，「原始林で伐り倒される木」[7] などは直接に生活に必要な自然対象である。人間は，他の動物と同じく生存のために，食料の確保，住居造り，子孫を残すことなどをまず根本的な課題としている[8]。人類は，アフリカ，ヨーロッパ，アジア，アメリカにと移動していき，居住地域は地球的規模となり，したがって寒帯，温帯，熱帯など自然条件が異なる様々な地域に住み，そこでは直接的生活資料も多様であり，貧しい地域，豊かな地域，種類少ない地域，種類も量も豊かな地域がある。人間に対して常にその周りに生存に直接役立つ自然の恵みが豊かであれば，人間が自らの生存のために労働する時間は短いものである。「生産者の維持と再生産とに必要な労働時間はそれだけ少ない」[9]。このような地域社会において成立するのは，直接にはたっぷりとした自由時間，休息の時間である。『資本論』ではアマゾン川流域の住民，および東アジアのパン伐採者を取り上げ，１週間に２，３時間の労働で生存可能なのでそれ以上は労働はしていないとし「有り余る自然は……人間を自然の手に頼らせる」[10] とする。このような地域で，資本が投資され，労働者を雇用する企ては成功しない。彼らは，生存のためのものは回りに摂取可能な形であり，毎日朝から晩まで働く必要はまったくない。確かに，そのような地域の産物は種類は少なく，したがって１年中ほぼ同じものを摂取する生活であろう。そのような単調さを肯定すれば労働しなくても良い時間をえられる。

古代エジプトもこのような地域であった。しかしここでは，自由な時間があることが古代の奴隷所有者の国王をして大量の労働を直接的生活手段の取得のためではなく，現代に至るまで保存されたピラミッドなどの巨大な王の世界を誇示する芸術品を建造する時間に動員された。ストーンヘッジ，イースター島の石像など現在では建造不可能な芸術性と神秘性に満ちた建造物は，直接的生存の手段はあり，余剰の時間があるところで可能であった。

アマゾン流域住民と古代エジプト，この両者は，十分な自由時間が確保されている社会，生活に直接役立たない巨大建造物が作られる社会と，外見上，無階級社会と奴隷社会として，正反対のものと見える。しかし，膨大な人間が直接的生存手段を比較的短時間で自ら確保できたという点では共通している。この直接的生活資料を人間が取得不可能な立場に置かれ，ただ賃金労働者になり賃金を受け取ることによってのみ取得可能な状態が全社会的規模で作られたとき，それが資本主義社会である。

ところで，土地自然につき，それを人間自然との関係で見ると，一見すれば，人間の手がまったく加わっていないものが土地自然であるとの印象が浮かび上がる。土地そのもの，あり余る自然などの言い方もそのイメージに適合するものであった。しかし，現在における土地自然で，純粋にまったく人間の手が加わっていないものから，完全に土地自然から切り離され，人間自然に連続し附加されたものとしての土地自然まで存在している。第１に，人間の影響や，その足跡がほぼ完全にない，土地自然がある。それは広大な海面，深海，誰も立ち入れない原生林，砂漠や高山の一部である。これらは，人間社会の外にあり，その面積は広大なものであり，そして土地自然の方からは人間社会に様々な影響を与えているものである。（砂漠については，過去，草原地帯であり，人間社会が成立していたがその後砂漠化し，無人地域となったものがある。）第２に，過去の長い時間の間に多かれ少なかれ人間の手が加わったが，現在なお人間にとっての自然であるものである。雑木林の里山，農村の自然風景としての田園，水田，緑の

畑，森林，海岸通りはそうである。都市の緑豊かで鴨，リスなどが遊んでいる公園もそうである。野生の陸上動物もそうである。土地自然と分類される大多数のものはこの範疇に入ると思われる。自然対象と思っており，自然の姿は保存されているがすでに人間の手で加工されている土地自然である。第3に，ペットとして飼われている犬，猫，ハムスター，熱帯魚，鶏などの愛玩動物，動物園，水族館のペンギン，シャチ，イルカなどの動物たち，競馬場の馬などはもはや自然対象とは分類できないものであり，人間自然のごく近いところに人間を不可欠の同伴者としている動物たち，人間自然の領域に入り込み，食事，住居などを保証され，また訓練され，したがって加工された土地自然である。第4に，やはり動物は動物であるが自然対象というより，すでに食品（商品）に加工される原材料という刻印を押されたもの，食肉用の管理された牛，豚，鶏などである。『資本論』にはこのような点についても言及し，「それ自身すでに労働によって変えられた飼育された動物」，あるいは「多くの世代を通じて人間労働を介して継続された変化の産物」[11] としている。第5に，労働手段，機械体系である。鉄鉱石などその素材は自然のものであり，出自は土地自然であるが決定的に自然からは切り離され，人間自然に随伴し，制御され，膨大な人間の生存を支え豊かにする生産物を生み出すシステムとしての機械体系，ここでは，人間自然と土地自然としていた土地自然はその姿を完全に大量生産のシステムに適合的に加工され，人間労働に直接につながり労働の生産性を人間の自然力を格段に凌駕する体系という位置付けで深く人間自然に組み込まれたものである。人間自然が，その実践前のデータ収集，分析，計画，構想，そして実践という分野が直接的生活手段の生産にとどまらず，むしろ，直接的でない労働手段，機械体系の構想，設計，製造に向くことが格段の膨大な生活対象を生産する唯一の道であるという構想を持ち得たことによる。資本主義が実現した隔絶した生産力は，この機械体系によるものである。生活手段の直接的取得は社会の低い段階であり，生活手段と労働手段の双方を生産する社会は社会のより高い段階であり，資本主義の時代は，労働手段の比率は高まって行く時代である。

『資本論』はこの点を，一貫してかつさりげなく示している。その跡を簡単に整理しておきたい。冒頭第1巻第1章は商品分析から始まるが，そこで，あまり注目されてはいないがすでに次の文言が組み込まれている。商品は「直接に生活手段として，……それとも回り道をして生産手段として」[12]，役立つ。価値形成と価値増殖の過程は，機械と原材料は過去の労働，そして新たに行われる生きている労働との関係である。相対的剰余価値の生産においては，機械による協業と分業，長時間労働の新たな原因として，機械に対応する部分労働の連鎖である。

それには，今までの文脈をたどる限り，人間の手が加えられていない純粋の土地自然，あるいは，過去人間の手が加えられているが直接に自然対象である土地自然，つまり第1，第2の比重が急激に下がって行くことを含んでいる。第3のペットなどが商品として販売され，愛好者が増加しているのは，やはり，人間自然は土地自然を不可欠の同伴者とすること，自然の姿を完全に離脱した機械の時代は，土地自然との決別の時代を感じさせ，実現可能な自然の復活として第3の自然に向いている。

機械と人間労働を比較し，機械は新たな機械に変わらない限り生産能率は改善されることはないが人間労働は，改善によって同じ人間がよりレベルの高い労働遂行能力を獲得するとし，人間の発達能力に触れている。「生きている機械は……代々の技能を自分のうちに積み重ねれば積み重ねるほど，ますます改良されてい

く。」[13] 人間自然の発達の課題である。

第二章　商品経済

第１節　土地自然の多様性と商品経済

資本主義の土台は商品経済である。商品経済が社会で一定の広がりを見せていることが資本主義成立の前提条件であり，逆に資本主義は商品関係を広く深く定着させ，100％商品関係にすることを目的としている。私的所有と社会的分業という生産関係の上で労働生産物が取る形態，それが商品であり貨幣である。社会的分業は，異なる使用価値を持った商品が，無数の互いに独立した私的生産者たちの手で生産され，交換されることである。それを可能にした自然的条件は，土地自然の地域的差異とそこでの自然生産物の質的差異である。ある地域全体で生産されるものが北極のカルビーの肉のみといった地域において交換が行われることはない。土地自然が地域的特徴をもっており，生み出される生産物が個性的であること，それぞれが自己完結的な世界であった時代から，その行動領域を拡大していき，その先に異なる社会があり，相互接触の時代に入り，異なった地域が一つのより広域の地域内部における複数の異なる地域として接触するとき，両者ともに自らの地域の生産物のみを享受した段階を過去のものとし，それに加えるに新たな他の地域の生産物を享受することになる。ここに，交換関係，市場が成立し，継続し，拡大し，発展していく端緒的根拠がある。『資本論』では，この点に関しても異なる無数の生産物を生産手段と生活手段に分類し，社会的分業を大きく区分するものとして生産手段の市場と，生活手段の市場の２つを置いている。「共同体が違えば，それらが自然環境の中で見出す生産手段や生活手段も違っている。……この自然発生的な相違こそは，いろいろな共同体が接触するときに相互の生産物の交換を呼び起こし……商品に転化されることを呼び起こすのである。」[14] 機械などを持たない地域が，機械をすでに商品として生産，販売対象としている他地域と交換関係に入り機械を入手するならば当該地域は，機械の開発過程を省略して最新の生産手段を使用することが出来る。これは他地域の珍しい生活資料との出会いとは区別される接触内容である。対象が種類少なければ生活は単調である。差異があるより多数の地域との交換関係，つまり商品経済が進めば進むほど，生活の質は高まり，人間自然は異なる多用な質に刺激され，それが変化，成長に結びついていく。接触する地域の数が１であれば，今までの１種類から２種類の生産物が利用可能となり，地域が 99 であれば 100 種類の異なる生産物を享受できる。このように見れば，どこもが単一の同じ自然であり，同じ植物相であり，同じ動物相である地域が自給経済を営んでいる場合，その地域内部においては商品経済は成立しない。商品経済は，土地自然が差異と多様性を持っている地域である。１年を通じて寒冷な，あるいは熱帯の地域と，春夏秋冬，四季の変化と折々の姿をあらわす植物，動物の多様性を持つ温帯地域を比較すると，温帯地域は，交換と商品経済，したがってその土台の上の資本主義が成立，発展する自然的条件を準備していたのである。

『資本論』は，一方では，イギリス資本主義に時間的に前後関係にあるだけで，ドイツもまたあらゆる地域も資本主義となると論定していた。しかし，同時に，このように，土地自然の特性との関係で商品経済の成立と発展可能性を説き，地域的多様性との関連で資本主義成立を説いている。「温帯こそは資本の母国である。土地の分化，土地の天然産物の多様性こそ社会的分業の自然的基礎をなすものであり，人間をとりまく自然環境の変化によって人間を刺激して人間自身の欲望や能力や労働手段や労働様式

を多様化させるものである。」[15] ここに自ずから，本稿のテーマである，人間自然と土地自然の関連が指摘されている。人間自然は欲望水準を高め，発達し，様々な労働手段を生み出していく。それは，人間自然の内部に，自らを変化させていく能力，適応と変革能力を潜在的に持っているが故である。しかしそれは，土地自然の特質によって本源的に規定されており，自然の多様性に触れ得ることが条件となっている。

第２節　使用価値，価値・剰余価値，人間自然

労働生産物が生産者自身の自己消費の対象であり限り，商品生産は成立しない。自らの生産物は100％自己消費の対象ではないこと，それが商品生産の第１の条件である。他の私的生産者の欲望の対象であること，それが第２の条件である。異なる生産物を持つ複数の私的所有者が，相手の商品を自らの使用価値と出来，かつ両商品が等価物として，価値量における損得なしに交換できること，それが第３の条件である。商品所有者は，自らの商品が他人のための使用価値を持ち，交換後は等価物を確保できていること，これが私的所有と社会的分業という社会システムに人間が適合する姿である。まず使用価値について検討する。それが人の欲望対象であるという指摘にとどまる限り，商品について何も論じたことにはならない。他人の欲望対象でなければならず，他人の欲望対象である商品を生産することが絶対的条件である。しかし，実際に市場で対象であるか否かは事前には論定不可能である。販売されたという結果が出た後で初めて欲望対象であったことが立証される。これが実際の姿である。市場における商品は確かに商品である。しかし，それは誰か他人に購買され，消費対象になって初めて商品であったことが立証される。商品でなくなり，単なるその人の消費対象となったときに，つまり事後的に，それが商品であったことが分かる。「生産物が他人の欲望を満足させるかどうかは，ただ商品の交換だけが証明することが出来るのである。」[16] したがって，商品生産者は，事前には予測不可能なテーマを予測可能なものと位置付け，社会の意識状況，潜在的（と感じる）欲望対象，実現可能性（購買力の水準），自らの生産可能性などを調査，分析，勘案して「消費対象であるに違いない」商品を生産する。結果を先取りして，精密な設計図が書け，そして想定したとおりの結果を生み出すという人間自然に固有の特質は，商品生産に関しては，その立脚点はゆすぶられ，混沌とする。そうであればあるほど，100％確実な販売システムを構築するという無限衝動に入り込んでいく。このような商品経済のシステムに適合的に，人間自然は発達し，絶えざるチャレンジという１特質が定着していく。その意味で，たえず注目され，シュンペーターのものだとされるイノベーションは，シュンペーターが生まれた年（1883年）に亡くなったマルクスによる『資本論』冒頭商品論の使用価値分析にすでに含まれていたものである。事実,「貨幣所有者にとっての使用価値」「新たに生まれた欲望を満足させる」商品,「或る欲望をこれから自力で呼び起こす」[17] など，欲望の新しい分野をいち早く確認し，それに的確に対応する新商品を提供する，あるいは，新商品を提供し，それが人々が前から潜在的に求め，かつ欠落していたものであることを確証することなど商品開発や革新にかかわる分析が行われている。

同じテーマを角度を変えて検討しよう。以下の式においてＷは「商品（Ware）」である。下付きの最初の数字は業種を，その次の数字は，業種の中での商品種類を表す。$W_{1\text{-}1}$ は衣料品業（最初の$_1$）が販売する１商品ジーパン$_{(1\text{-}1)}$を表す。一商品生産の生産と販売，そして購買の流れは次のように表現できる。$W_{1\text{-}1}$，$W_{1\text{-}2}$，$W_{1\text{-}3}$，

$W_{1\text{-}4}$，…→ G → $W_{2\text{-}1}$, $W_{2\text{-}2}$, $W_{2\text{-}3}$, W_3, W_4…。衣料品という商品・W_1 を扱う人は，ジーパン$_{(1\text{-}1)}$，ジーンズのスカート$_{(1\text{-}2)}$，綿のソックス$_{(1\text{-}3)}$など，特定業種の生産と販売の対象である商品を，つまり同一系統に属するがその内部では複数の種類である商品を販売する。販売対象は同じ業種の，したがって同一分野の膨大な商品である。それらは，無事販売に成功すれば貨幣（G）に転化する。その貨幣で，自分の消費対象である商品を購買する。購買対象は，生産と生活に必要な商品，たとえば W_2 は食肉業であり $W_{2\text{-}1}$ は牛肉，$W_{2\text{-}2}$ は鶏肉，$W_{2\text{-}3}$ はハムなど，W_3 は新規購入するミシンであり，W_4 は綿布である。商品生産者は一業界に属し，自分の専門分野で販売可能性が100％に近い商品を絶えず，構想し，吟味し，提供する。これは，大量であり，莫大な貨幣に転化する可能性と転化しない可能性をともに含んでおり，人間の資質はその点からも世の中を読む鋭い感性や，緻密な設計能力を身につける方向に作用する。「物が無用であれば，それに含まれている労働も無用」[18] であるという商品社会の法則は人間自然の潜在力を発現させ，諸能力をレベルアップする客観的でかつ強力な力である。人間対自然と並んで，社会システムと人間自然の関係に留意する所以である。

商品交換は等価物同士の交換を原則とする。この等しい価値に関して，１物１価といわれる価値法則と人間自然の関係を検討する。同じ商品を生産する私的資本が複数あり，それぞれの資本がこの商品１単位を生産する時間は様々である。単純平均の場合と加重平均の場合それぞれ簡単な２つの式を示す。同じ商品を生産する資本がA，B，C，D，Eの５社あり，それぞれ商品１単位生産するのにA社は３時間，B社は４時間，C社は５時間，D社は６時間，E社は７時間かかる。１時間労働が1000円とすれば，同じ商品がそれぞれ3000円，4000円，5000円，6000円，7000円かかる。自社だけ他社より価格が低いことはよく売れる条件である。しかし，また価格は高い方が利益は大きくなるはずである。A社からE社まで，全ての資本は，互いの価格を見ながら，低くしてたくさん売るか，高くして利益を大きくするか，この両者を勘案して価格をつけることになる。A社は3000円で売ればたくさん売れるが，4000円とつけても高価格とはならず，利益は大きくなる。E社は，7000円で売れれば良いが，他社ははるかに安いコストで生産しており，7000円では売れないことが分かる。6000円でも高いであろう。このような動きの中から出てくるもの，それが１つの商品には１つの価格，一物一価の法則といわれるものである。５社が，生産に要した総労働時間が分子であり，3 + 4 + 5 + 6 + 7 = 25時間である。分母は生産者数であり，ここでは５社である。25時間／５社＝５時間という式が導きでてくる。１時間1000円であると5000円，これが社会的価値である。この価格を眼前に見るとき，５社それぞれが思うことはまったくばらばらである，A社は，３労働が５時間，3000円のものが5000円になったのであるから2000円の超過利得を得て満足である。同じくB社も，A社ほどではないが4000円の物が5000円で売れたことになる。C社は５時間，5000円で損得なしである。D社は１個売るたびに，１時間分，1000円ずつ損をする。E社は，７時間，7000円かかったのに，５時間，5000円にしかならず，２時間，2000円の損となり，このままでは経営を続けることは困難である。このように価値法則は，同じ商品を作る全ての生産者の条件を組み込んで，その総和，その総平均で作られた物であるが，一旦水準が形成されると，個々の生産者に対して，まったく正反対の，A社，B社には得になる，D社，E社には損になる強い圧力をかけることになる。その中で，全社は，同じ商品をより短い時間で生産し，自社のみ特別の利得を確保しようとする。結果

として，例えば，A社は2時間，B社は3時間，C社は4時間，D社は5時間，E社は6時間で生産する。先と同じやり方で，価値は20時間／5社＝4時間となり，同じ商品は5時間から4時間，5000円から4000円になる。資本主義における技術進歩や発展の原動力はこの競争関係と価値法則にある。結果は，価格は下がり，その水準で，A社，B社は儲かり，C社は標準で，D社，E社は損をする。ただ，現実は，均等に進行することはまれであり，B社がA社を追いぬくことがあり，D社は倒産して姿を消していることもある。あるいは，当該商品自体が，新たに開発された商品によって市場から駆逐される場合もある。ここでは，同じ労働時間で生産する資本の数が1社ずつではなく，複数であるという，1歩具体的なところで価値を見ておきたい。3時間は1社，4時間が2社，5時間が3社，6時間が2社，7時間が1社の場合，3×1＋4×2＋5×3＋6×2＋7×1／9＝5時間となる。真中の5時間で生産する会社が1番多く，そこで水準が決まる。生産力が高い資本が多数おり，それ以下の資本はばらつきがある場合，例えば，3時間が6社，4時間，5時間，6時間，7時間が1社ずつであれば，価値は，3×6＋4＋5＋6＋7／10＝4時間である。5時間，6時間，7時間で生産している全ての資本は倒産の危険性が高いと言える。逆に，3時間から6時間まではすべて1社，7時間が6社である場合，価値は3＋4＋5＋6＋7×6／10＝6時間である。3，4，5時間の資本は額に差はあるがすべて利得し，7時間の多数の資本は損をする。このように，人間自然は，価値法則という経済システムの規定性を受けて，生き抜くために創意工夫をして生産に必要な時間の短縮を計り，上位に浮上し，また努力はしても，社会における相対的な，自分ではコントロールできない原因によって没落する世界に生きることになる。人間自然の優れた特性である予知能力，激しい変化に適応して方針を転換できる能力を身につけるのも価値法則であり，そのような努力があったとしても没落に導くのが価値法則である。

価値法則はこのような空間的に並んだ複数の資本間において作用するが，また時間的に以前に生産された商品と，その後より短時間で生産される商品が並んだ場合において，過去の商品に必要であった労働量は補填されない。「一商品の価値は，その商品に含まれている労働の量によって規定されてはいるが，しかしこの量そのものは社会的に規定されている。もしその商品の生産に社会的に必要な労働時間が変化したならば，前からある商品への反作用が生じる。」[19]

技術革新，生産力の発展はこのように確実に実現していくが，それは個々の商品生産者に対する絶えざる強制を通じてであり，この強制を通じて，人間自然はその環境適応能力と競争能力のレベルを上げていく。商品経済社会は，共同体社会ではなく，人間はスケール大きい規模で共同の利益を見出すのが困難であり，一面，連携するが，他面では，このように互いに敵視する関係になる。緊張を持続させる人間類型を生み出すシステムと言えよう。これは，人間自然の特質ではなく，商品生産の経済法則に無意識に適合する結果であり，資本主義における発展の内容である。また，ここでは，個別的な労働時間と商品価値は直接には連動しないことが示されており，商品の価値は労働時間でなく，貨幣によって表現される。

第三章　資本主義と人間自然・土地自然

資本主義は以下見るように，一見すれば同時には成立しないファクターがどちらも存続し，どちらも深く社会関係を支配し，コントロールしている社会である。確かに，闇だけの世界はなく，光のみの世界もない。プラス面とマイナ

ス面とこの双方を見るという視点は，特に，階級的利害関係などにより，肯定のみあるいは否定のみいう捉え方に比べ，特定の社会システムを客観的に把握するものであり，事実『資本論』においても，正負の両面把握が試みられている。資本主義に関してはプラス面のみで資本主義を十全に把握したという想念，逆にマイナス面のみでもって資本主義の全面的把握であるという想念が，対立的ではあるがそれぞれ広がりをもっている。プラス面での把握は，資本主義をそれ以前の野蛮で暴力的独裁的社会を破壊し，平等な近代的人権意識と高い技術を実現した文明社会としてのみ把握する。前近代的な搾取社会は消滅したと理解し，確信する。マイナス面での把握は，資本主義を，奴隷制，農奴制と同じ搾取社会，階級社会としてのみ把握する。むしろ，資本主義がこの正反対の性格規定をともに持ち，人々はこの正負両面の要素を持つ資本主義に包摂され，翻弄され，しかしまたその成果を享受もしているという事実にこそ，この体制の強固さを見ることが出来る。このようなことを念頭に置きつつ，資本主義が持ついくつかの側面を整理しておきたい。

第１節　使用価値から価値・剰余価値へ

前章で見たように，商品は使用価値と価値との統一物であった。この使用価値と価値という区分は，いま使用価値と価値・剰余価値と一歩具体化した形では，資本主義以前の奴隷制，農奴制という社会システムと資本主義を比較する基準として転用できる。資本主義以前は使用価値重視の時代であり，資本主義という価値・剰余価値重視の時代へと転換する。使用価値重視の時代とは，奴隷制であっても自家消費を目的とし，自然的生産物がそのまま消費対象である。先の「温帯は資本主義の母国」という言葉を想起すれば，これは，現代においても，一年を通じて安定的に生活素材が直接に得られ，単調さを厭わなければ，商品社会のような社会的プレッシャーを受けないところで，必要労働は短時間で足りる社会である。このようなところでは，たとえ奴隷社会となったとしても自然的生産物の自家需要という特性により一定の制限された支配体制である。労働生産物がただ使用価値としてのみ受け取られ，かつ当該社会成員が直接の生活資料として消費するという枠の中で行われるものである。そこでは，また互いに他人であるという私的所有の関係は存在せず，したがって商品社会のように，他人の消費目的で生産されたが，消費対象であるか否かは事前判断不可能といった，奇妙なものではなく，生産物は直接に受け止めらる。個性，伝統，風格ある自然，日の出とともに起き，日没とともに眠るという日々である。資本主義的商品生産が，それ以前と区別されるのは，このように見れば，生産物が使用価値のみの自然物であったものが，使用価値に加えて価値・剰余価値という新たな性格規定を受けた段階と言える。使用価値はその時々の生活を支える対象として，飢えをしのぐレベルから過度の奢侈をするレベルまで大きな幅はあったとしても限界は来る。しかし，価値・剰余価値が主軸になると，自然的なものをまったく含まず，労働の量的差異と価値量の差異としたがって貨幣の量的差異が唯一の基準になる。とくに資本の取得対象である剰余価値は常に限界をもった量でしかない。ここに資本主義的生産を規定する特質がすでに現れている。使用価値を主軸とし，直接的自家需要のための生産では，たとえ奴隷制度という階級社会においても，欲望は低いレベルに制限されており，したがって労働も「適度な家父長制」的雰囲気をもっていた。資本主義は，価値・剰余価値生産を主観的目的とし，使用価値をそのための手段の位置に転落させ，無限の労働，一日であれば極限の 24 時間労働，24 時間労働分の価値，等量の貨幣を目指さざるを得なくする。

『資本論』では「過度労働の文明化された残虐」[20] と規定し「風習と自然，年齢と性，昼と夜という限界はことごとく粉砕された」[21] と判断している。このようなものとしての資本主義，それと人間自然・土地自然との相関，それが検討課題の１つである。

第２節　資本主義・人間自然・土地自然

資本主義は，富の二大源泉としての人間自然と土地自然を資本制生産に包摂する。その二大要素の特徴は以下の４点である。

第１．土地自然は本源的には何よりもまず，大地であり，大海原であり，また大気，自然水，鉱物資源などである。それらは所有対象でない場合無償である。資本は直接的生産過程を根本的に支えているこれら土地自然を自らの無償生産資源としている。これらは「自然から無償で贈られたものである。」[22]

第２．人間自然も土地自然もともに弾力性を持っている。資本は一定の貨幣額を投資し，生産体制を整えるが，両者は貨幣額を基準にしてそれ以上の資本の増大をもたらし，かつその限界は「弾力的」である。弾力的であることが，両者がともに豊穣にいたる可能性と破壊されるに至る可能性を持っていることの証である。人間自然，土地自然はともに弾力性を持ち，それが「資本の弾力的な力」[23] になる。

第３．人間自然と土地自然は，それぞれの特質を生かす形で適切な対応がなされたときに豊穣への道を歩むことが出来る。両者は，過度の干渉，酷使，搾取により破壊され，荒廃する。しかし，その逆に，まったく無視されるときにも荒廃が予想される。破壊に至るのは積極的，一方的干渉と酷使であるが，その正反対の無視，放置も崩壊原因となる。「機械の物質的な摩滅は……機械の使用から生じ，他方は使われない剣が鞘のなかで錆びるように，その非使用から生じる。」[24] ここでは，正反対の原因による破壊が，機械に関してのみ述べられている。しかし，人が住んでいる家と廃屋を比較しても，廃屋は使われないことによって崩壊している。鉄道のレールは使われたほうが光ってい，放置されれば錆びている。人間に対して，暴行や暴言，悪口ともう一つは徹底的な無視である。破壊の２つの道は機械だけではないことは明らかであろう。特に，放置されることによる人間自然と土地自然の崩壊を避けるという点では，第１章における，人間の手が加わったが，なお土地自然であるそのような土地自然が注目される。酷使され，破壊された土地自然を回復すること，荒れ果てた土地自然を豊かにすることは可能な課題であることが分かる。「人間が消費する土壌成分が土地に帰ること，つまり土地の豊穣性の持続の永久的自然条件」[25] といわれる。これは，土地生産物が消費されその老廃物が土地に回帰することが土地自然の豊穣の条件であり，都市と農村，大工業はこの回帰を妨げ，自然が破壊されるとしたものである。土地自然への適切なサポートの必要性を説いており普遍化可能な指摘となっている。

適切な人間関係が人間自然にとって不可欠なものであることが確信できる。人間自然は「発達能力」を持っている。しかし，社会システムとの相関の下で，それは様々な様相を示し，自動的には発達は不可能である。児童についてたとえば親の貧しさ故に子が放置されると，発達のために必要な刺激が与えられず，そこでは「自然発生的な無知」状態にとどま

る。工場で長時間労働が続くなかで，児童の心と体は「資本主義的搾取から生じる精神的萎縮」と「知的荒廃」[26] を生み出す。児童が労働だけでなく学習の機会と時間を得るとき，児童は「全面的に発達した人間」[27] が可能となる。ここでは，酷使と放置が児童に関して述べられ，適切な対応が「全面的に発達した人間」を可能にすることが示されている。

第４．総じて，資本主義は一面では，剰余価値生産という枠組みに規定され，人間自然と土地自然の破壊を帰結する。「資本主義的生産は，ただ，同時にいっさいの富の源泉を，土地をも労働力をも破壊することによってのみ社会的生産過程の技術と結合とを発展させるのである。」[28] ここには，格差社会，貧困など人間にかかわる問題と，公害，環境など自然にかかわる問題が指摘されている。しかし，『資本論』の分析はそれにとどまるものではない。資本主義における賃金労働者は全面的に発達することの可能性を持っていることが指摘されている。資本主義的大工業は，労働者の安定的な状態を過去のものとし，産業分野の入れ替わり，好況と不況などにより労働と生活の不安定性を高めていくが，それが「労働者の全面的可動性」を生み出し，さまざまな種類の行動様式を理解し，実行できる人間，「全体的に発達した個人」[29] を生み出す。第１章では，温帯の地域的自然的多様性が交換関係，商品生産の前提であり，資本の「母国」と言われていた。ここでは，そのような社会で，労働者は様々な分野を経験でき，人間が持つ多様な潜在力を顕在化し，全体性にいたることになる。この点，注 308 におけるアメリカに出稼ぎに行ったフランスの１労働者のコメントは貴重である。「カリフォルニアでやっていたようないろいろな仕事が自分にできようとは，私は思ってもいなかった。私は，印刷業のほかには自分はなんの役にもたたないのだと硬く信じていた。……。どんな仕事にでも役だつというこの経験によって，私は自分が軟体動物であるよりもむしろ人間であることを感じている。」[30]

第３節　隠された対象としての剰余価値

賃金労働者の１日８時間労働とその価値としての１日２時間労働，この差額が６時間分の剰余価値であり，資本家が無償で取得する対象である。剰余価値率は６／２で 300％である。以下，１時間労働の貨幣表現が１万円とする。ここでは，剰余価値が生産されている事実と，同時に，それが生産されてはいないという表象としての事実がともに明らかにされる。剰余価値生産という賃労働の行う無償の労働の事実と，それぞれが自らの労働に応じてのみ所有をしているに過ぎず，搾取などありえないという表象とがともに対象とされる。賃金労働者の賃金は一人の人間として，正常に生活するために購入する商品価値額と等価である。労働者一家は，１日に，１時間労働の食品を購入，消費し，５時間労働分の水道，光熱費，新聞代金などを毎月支払い，１回で 10 時間労働の衣類を年２回購入し，150 時間労働の家庭電化製品を 10 年間使い，6750 時間労働の家屋を 25 年間使う。これらは一定の労働を要した商品を購入しているのであるから，社会的分業のもとでそれぞれ，購入主体以外の労働者が費やした労働時間である。１日の生活のために購入した商品の製造時間総額は，分子が，365 × 1 プラス 5 × 12 プラス 10 × 2 プラス 150 × 1 ／ 10 プラス 6750 × 1 ／ 25 ＝ 730，分母は 365 であり，730 時間割る 365 時間で，答えは２時間，これが必要労働

時間である。したがって，１日８時間の労働は２時間の必要労働時間と資本家の所有対象となる６時間の剰余労働時間に分かれる。１時間が１万円とすれば，１日の賃金は２万円であり，資本家が取得する剰余価値は６万円である。１万人の賃労働者を雇用している資本家の１日の取得分は６億円である。ここで，すでに表象的現実から見れば２つの問題が含まれている。１日８時間労働，１日２万円の賃金，１日１人６万円の，１万人では６億円の剰余価値，これらはすべて誰もが疑問の余地がない。第１の問題は，１日８時間労働は，８時間でありそれが２時間と６時間に分かれてはいないという事実である。第２の問題は，２万円で２万円分の諸商品を購入，消費しそれは労働者一家の生活に必要なものであることは分かるが，２万円分の諸商品を生産するに要した労働時間の総体は分からないという事実である。そして，表象的事実としてあるのは，１日８時間労働と１日２万円の賃金との相関である。『資本論』は剰余価値の秘密を，経済学史上初めて科学的に明らかにした作品である。しかし，同書には，それが実際には，目には見えないという事実と，何故目に見えないかその理由が明らかにされている。８時間労働が実は２時間と６時間に区別されるという点について，直ちに「これは目に見えない。剰余労働と必要労働とは融合している」[31]とし時間としては８時間労働以外にないとしている。もともと，商品と貨幣の関係において，貨幣は商品価値と常に等価ではなかった。むしろ，私的所有と商品生産は予測不可能な需給変動とそれに適合する価格変動が必要であり，商品価値からの価格の乖離は日常的事実である。根本的には，各個別商品に含まれる労働量と価値量とは量的にずれているのが常態である。ここに２時間労働の価値物が８時間労働の貨幣表現として成立する根拠がある。貨幣形態は，価値関係のずれを「物的におおい隠す」[32]のである。

しかし，実際には，８時間労働とは，２時間の必要労働を６時間超過して労働させる力を表しており，固有に資本主義と商品社会のものである。８時間労働は，２時間労働の価値物である労働力商品を購買した資本家が，その使用価値を消費する内容であるから，価値を払えば使用価値の消費権は買主に属するという商品原則の枠内に完全に収まっている。ただ，それがどちらも労働時間として量的に比較可能であることが資本家と賃金労働者の対立理由になる。使用価値を消費する場所は，他の商品と同じく流通の外であり，商品の買主の私的占有の場である。ここは，「無用のものは立ち入るな」と入り口に書かれた「隠れた生産の場所」[33]である。表層の流通における資本家と賃労働者の関係は，互いに自由で，互いに平等で，互いに自らの所有対象（貨幣と労働力）の所有者としてのみ，そして互いがみづからの利益のみを念頭におく場面である。ここに，資本主義を，自由，平等，所有を実現した民主主義社会と捉える根拠がある。剰余価値の生産とその資本家による取得は，私的所有の社会において，互いに閉ざされた世界内部で進行することであり，資本家の専決領域に属するテーマである。問題は，資本主義につきそれが光の世界なのか，闇の世界なのかを判別することではなくて，光と闇がどのように並存し，互いに転化し，移行するのか，その関係を見ることである。確かに，剰余価値は隠された対象である。

第４節　過度労働と強制的怠惰

人間自然と土地自然は，両者とも適切に手を加えられていれば豊穣への道を歩むことが出来る。過剰な介入としての人間と自然の酷使，逆の，無視と放置は両者が破壊され，崩壊する２つのケースである。資本主義においては，労働に対する需要は安定したものではなく，この過

剰と不足の両極端を行き来する。『資本論』では，この点を，様々なケースで見ている。第１．確かに好況期には労働力不足になり，不況期には失業者が増える。しかし，若年労働市場と熟年労働市場という区別のうえで同じテーマを見た場合には違った形が出てくる。熟練が必要な時代では，熟年労働者は多く雇用され，若年層は過剰になる。機械化などで，熟練が軽視されると，若年労働の需要が増える。したがって，過剰な時期と不足な時期はあるが，それだけでなく，過剰と不足とが同時に同一社会において現れる。「失業しているものが大ぜいいるというちょうどそのときに人手の不足が訴えられる。」[34] 第２．就業者は，失業者がいるという事実を念頭に置くとき，自らが失業者にならないために，資本の様々な要求に従おうとする。このことは，就業者における長時間労働や労働強化と失業者における労働機会の喪失をともに生み出す。一方の「過度労働」と他方の「強制的怠惰」[35] がお互いに条件付け合う。第３．好況期，特に時間賃金であれば12時間，14時間労働も自発的に行われる。しかし，不況期にその中でも特に苦境にある資本の下においては，労働時間は６時間，５時間となり，その場合労働力の価値は支払われない。「前には過度労働の破壊的な結果を見たのであるが，ここでは労働者にとって彼の過小就業から生じる苦悩の源泉を見出す。」[36] 第４．母親が家庭外で仕事をしている場合に，子供に対する「放任と虐待」[37] が指摘されている。

以上，資本主義における過度労働と過小就業を見てきた。過度でもなく過小でもない適切な労働のあり方を見出すことが人間自然が発達し，弾力性で豊かな日々を過ごす前提であることが分かる。それは，子供が放任でもなく虐待でもない環境で過ごすことと通底する課題である。

おわりに

以上，『資本論』における，人間自然と土地自然の分析の跡を見てきた。資本主義分析において人間自然，土地自然という表現は成立可能かという疑問がある。しかし，検討をした今，『資本論』においては，土地自然を広がる大地や海原のイメージで本源的なものとして位置付けており，またとりわけ，我々が自然対象と見ているものが長い過去において，手を加えられているものであること，機械体系や原材料は自然の出自であるが，完全に自然から離脱し，人間労働の生産性を決定する不可欠の補完者であることが明らかになった。また，人間自然は『資本論』にあっては，発達の可能性を持ちまた破壊の対象ともなる弾力的な，潜在力豊かな対象と捉えられていた。潜在力が豊かであれば，多様性がある環境の中で様々な世界に触れ，さまざまなことを経験し，遂行可能であることを感じるときに人間自然は，全面的に発達した人間への階段をまた一歩上ることが出来るのである。

（2007年８月19日）

注

(1)　最近では例えば，次のような研究成果が公表されている。角田修一『社会経済学入門』（大月書店，2003年），川上則道『『資本論』で読み解く現代経済のテーマ』（新日本出版，2004年），飯田和人『市場と資本の経済学』（ナカニシア出版，2006年），八木紀一郎『社会経済学』（名古屋大学出版会，2006年）

(2)　『資本論』（大月書店，『マルクス・エンゲルス全集』23巻，以下同様）664ページ。

(3)　井尻正二，湊正雄『地球の歴史』（岩波新書，1965年），丸山茂徳，磯崎行雄『生命と地球の歴史』（岩波新書，1998年），長谷川眞理子『生き物をめぐる４つの「なぜ」』（集英社新書，2002年），三井誠『人類進化の700万年』（講談社現代新書，2005年）を参照されたい。『資本論』では人間そのものの自然では「たとえば人種」と言うに止められている。人種とは３大人種を含むものであろう。様々な人種などの

多様性と差異を十分に念頭に置いた上で，強固な社会システムとしての資本主義の普遍性を語っているのであり，もっぱら普遍性のみを語ってはいないことの一証左となっている。世界中すべての地域は資本主義になるとは想定されてはいない。

⑷　この点については，梅垣邦胤『資本主義と人間自然・土地自然』（勁草書房，1991 年）Ⅲ　第３章　資本の生産力　を参照されたい。なお，これは商品論の課題であるが，正確な予知のための情報に関して，商品を購買するさいの正確な情報の可能性という問題は残っている。購買対象の商品における，使用された原材料，添加物，保管内容，鮮度などの正確な情報を収集可能であることがミスなく目的を達成する条件である。その点，私的所有と剰余価値生産の枠組みの中で限界突破の可能性に関する問題として残っている。情報が正確さを欠き，虚偽情報が流されれば構想は破綻することになる。

⑸　賃金労働者階級に関する「発達した独自な労働力」（同上，225 ページ）にはそれを可能にする労働力の価値が必要とされるが，当然そのための時間が必要である。

⑹　同上，237 ページ。

⑺　同上，235 ページ。

⑻　飼い猫は昼間も眠っているようだがそれは，餌も住むところも保障され自分が行動する必要がないから目をつむっているのであり，睡眠時間は人間と同じである。

⑼　前出，604 ページ。

⑽　同上，665 ページ。

⑾　同上，236 ページおよび 238 ページ。

⑿　同上，47 ～ 48 ページ。

⒀　職人芸は今，例えば機械の修理等でも生かされている。渋井康弘「機械工業を支えた刀鍛冶の技」（『三田評論』2007 年 8・9 月，1104 号）を参照されたい。

⒁　前出，461 ページ。

⒂　同上，666 ページ。

⒃　同上，115 ページ。

⒄　同上，141 ページ。

⒅　同上，56 ページ。

⒆　同上，274 ページ。

⒇　すぐ上の２つの引用文とも，同上，306 ページ。

(21)　同上，305 ページ。

(22)　同上，787 ページ。

(23)　同上，795 ページ。

(24)　同上，527 ページ。

(25)　同上，656 ページ。

(26)　同上，521 ページ。

(27)　同上，630 ページ。

(28)　同上，657 ページ。

(29)　直上とも，同上，634 ページ。

(30)　同上，636 ページ，コルボン『職業教育について』よりの引用文。

(31)　同上，307 ページ。ワラキアの農民は領主所有地で領主のための労働をし，自らの占有地では自分に必要な労働をし，剰余労働時間と必要労働時間は空間的に明示されていることを示した理由はここにある。第８章　第２節　剰余労働への渇望　工場主とボヤールを参照されたい。

(32)　同上，102 ページ。しかし，新たに８時間労働の生産物は２万円であるのかという疑問が残る。そうであれば，すでに生み出されている６万円分はどこからも生じないはずである。

(33)　同上，230 ページ。なお，泉弘志『剰余価値率の実証研究』（法律文化社，1992 年）は統計的に剰余価値率を析出している。

(34)　同上，835 ページ。

(35)　同上，829 ページ。

(36)　同上，707 ページ。

(37)　同上，519 ページ。なお注 120（515 ページ）では，職業婦人は失業して，初めて自由時間を確保でき，授乳や裁縫を覚える時間とした，としている。